

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

ルカが伝えた「良い知らせ」

——ルカ伝福音書 訳述——

川上直哉

エリサベツは臨月を迎え、男の子を生みました。「神様が大きな憐れみをお示しになった」と噂をしあいながら、近所の人々・親戚の人々が集まりました。みな、とても嬉しそうでした。そうして8日が過ぎました。男の子に割礼を施す日がやってきました。このころまでに人々は、その父の名前をとって、その子を「ザカリア」と呼んでいました。しかし、その子の母親はその度に「いいえ、この子はヨハネです」と言っていました。「でも、そんな名前の方は、親戚中を見回しても、いませんよ」と人々は言うのですが、ききません。それで、人々は父親の方を見ました。「どんな名前にするのですか」と聞きながら、一枚の板を取って、口のきけない父親に渡したのです。ザカリアは板を取り、「この子の名前はヨハネ」と記しました。人々は驚きました。その時、ザカリアの口が開きました。ザカリアは神さまを賛美して歌を歌ったのです。側にいた人々はみな、おそれを覚えました。このお話は、ユダヤの全域で、広く噂になって語られたことでした。この噂を聞いた人々は、みな、心の内にこう言いました。「この子は、いったい、どんな人になるのだろう。神様の御手がこの子に添えられているのだから。」

この子の父であるザカリアは聖なる霊に満たされて神さまの言葉をその身に預かり、このように歌いました。

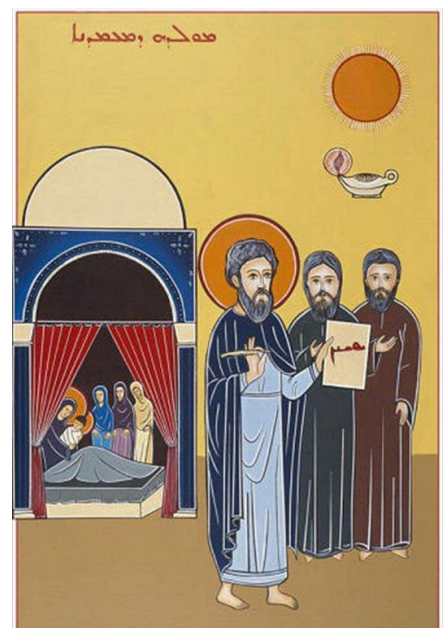
祝福あれ！

「主」と呼ばれる方 聖書の神
イスラエルの神に 祝福あれ。
神はその民に目を止めて
捕らわれの民を買い戻した。

その救いは立ち上がり 角のように立ち上がり
神の僕（しもべ）のダビデの家に 立ち上がっている。
いにしえ 神は 預言者により まさしくそれを 語られた。
敵の手を 憎しみ迫る全ての敵を 遠ざけて
救ってくださる約束の 預言の言葉は 成就した。
われらの父祖は 恵みを受けた。
神の尊い契約は 神によって今 実現された。
いにしえ 神は アブラハムを呼び出し
われらの父とし 約束を立てた。

恐れる事は なくなって
敵の手からも 救出されて
神のみ前にまっすぐに 聖（きよ）い道をどこまでも
この人生の ある限り 歩み行けるようにされ――

さあ今や 我が子よ汝は
「いと高き方の預言者」
と呼ばれるだろう。
汝はそのまま 御前に進み
その道を整えるのだ。
民に賜る救いの知らせを 携え分かち与えなさい。
その罪のすべて ゆるされたことを 伝えなさい。
われらの神の 憐みの内に
天のいと高き所に あげぼのが昇る。
そのあげぼのの 朝日は実に 私たちにまで届くのだ。
暗闇と死の影に坐する者 みなともに その日を仰ぐ。
私たちの足は そのようにして
平和の道に 誘（いざな）われるのだ。

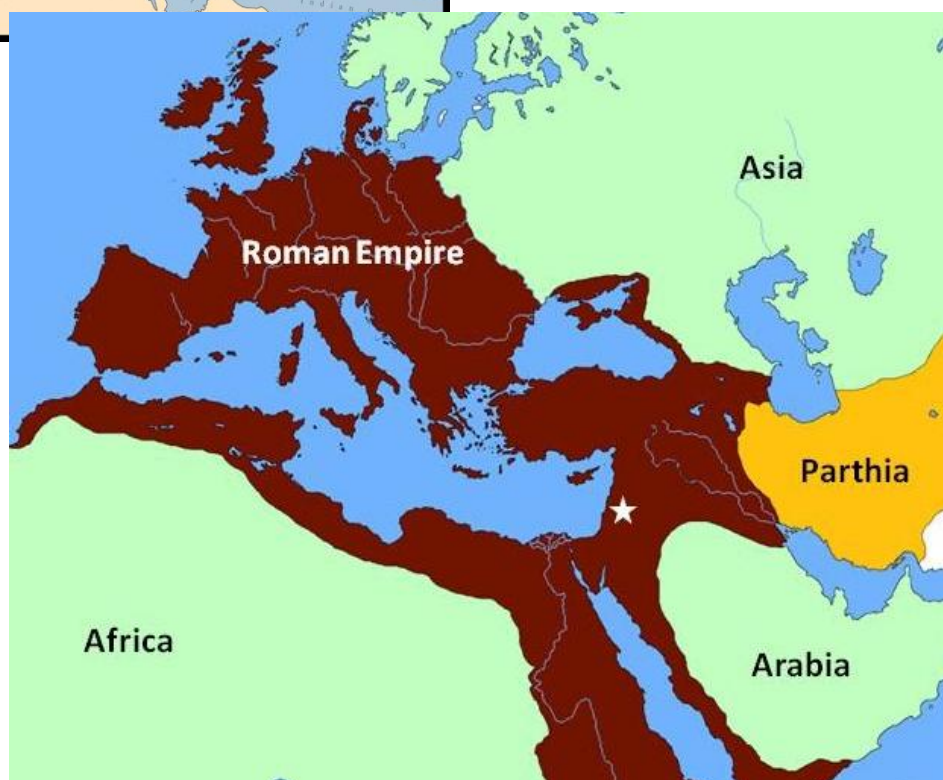


そうしてこの子は成長し、霊において強い者となりました。イスラエルのためにその身を現わすその日まで、荒地の中で暮らしていました。

そうした出来事が起こっている間に、一つの「ドグマ」が皇帝アウグスト陛下から出されました。「皇帝陛下のご命令」が出されたのです。「全世界の住民を登録せよ」というご命令でした。



ご承知の通り、このころ、マリヤムやエリサベツが住んでいる地域は「ユダヤ」という一つの王国でした。独自の文化を持ち、長い歴史を保ってきました。しかし、時代は「グレコローマン」と呼ばれる、ギリシアとローマの時代です。350 年ほど昔にあのアレクサンダー大王が地中海の東半分からヒマラヤ山脈のふもとまでを征服し、すべてを「ギリシア」にしました。その大帝国はほどなく分裂しましたが、世界はすべて「ギリシア」となった。そうして、この物語もギリシア語で書いております。しかしそこに、偉大なるローマ帝国がイタリア半島に起こり、地中海の西半分を征服しました。こうして「ギリシア世界」と「ローマ世界」が向き合い拮抗している今の世界になっております。



「ギリシア世界」に向き合う最前線の場所に、この物語の舞台である「ユダヤ王国」がありました。それは「シリア」と呼ばれる南北に広い地域の中央にあり、偉大なるローマ帝国におきましては重要な拠点となりました。この「ユダヤ王国」の王は、その地の利を巧みに生かし、歴代のローマ皇帝に上手に直訴し、属州の中の半独立国としての地位を保っていました。しかし、大帝国ローマとしては「ギリシア世界」を打倒しなければなりません。そのためには、戦費が要る。この物語の頃から、ローマ帝国の全ての地域で、新しい増税が始まっていました。「人頭税」でございます。

人は、不思議な力によってこの世に生まれ、この世を去ります。私たちは力を尽くしますが、人の生き死には、どうにもなりません。人のいのちは、神様のものです。でも、「生きていられるのは誰のおかげか」と、皇帝陛下は私たちに迫ったのです。「ローマが滅びれば、お前たちも生きていないのだ。今日を生きていられるのは、ローマのおかげ。だから、今日生きていることに感謝して、一人ずつ、生きていられることのコストを支払え」と。「人頭税」というのは、つまり、そういう事でございます。

なるほど、そういう考え方も、皇帝陛下のものらしく、あるのでしょうか。しかし、ユダヤ王国の人々は、そうした考え方に反発しました。ローマ皇帝とユダヤの人々の間に立つユダヤ王は、苦勞しました。実際には、しかし、あの有名なキリニウス閣下がシリア属州全体の長官でいらっしゃいましたから、方向は間違いなく定まっています。地方の一小国に、抵抗のしようもございません。ともかく、人の数を正確に数えて、一人ひとり、保証人を押さえ、税金を支払わせる。その試行錯誤が、権力の強烈な圧力の下、緊張感をもってユダヤ王国でも始まったのでした。

具体的には、「全員、自分の実家へ戻り、どこに住んでいる誰であるかを登録する」という方法がとられました。こうすれば、一つひとつの「本家」に人数確認の責任を負わせられます。長官であるキリニウス閣下のご手配、さすがでございました。

さて、ザカリアの家のエリサベツに匿（かくま）われていたマリウムは、9か月目になっていました。やはり、祭司の家で出産をすることは難しかったようです。出産は「血」に触れますから、あちこち穢（けが）れます。3か月も匿ってもらい、もう大丈夫だと思ったのでしょう。エリサベツも出産をしたばかりで、身動きが取れないなかでした。これ以上厄介をかけられないと、マリウムはザカリアの家を出て、ナザレに戻りました。そして、「住民登録のドグマ（皇帝陛下のご命令）」が発せられたのです。ヨセフとマリウムにとっては、最悪のタイミングでした。

何しろ、ヨセフは「ダビデの名家」の跡継ぎの一人なのです。その婚約者のおなかに、子どもがいる。それはつまり「ヨセフの子どもではない」という事になります。それで、マリウムは命の危険を感じ、ザカリアの家のエリサベツを頼ったのでした。ヨセフは良い男で、そんなマリウムをそのまま妻に迎え、生まれる子ども（マリウムは「聖霊によって授かった」

と言ってききません)を自分の子どもとして育てるつもりでした。エリサベツとザカリアの援助もあり、住み慣れたナザレであれば、無事に静かに子どもを産むことができたはずでした。でも「実家に帰らなければならない」。これは、たいへんな事態です。

帰らなければ、実家に大きな迷惑が及びます。しかし、帰ればマリウムは危険にさらされる。「家の名誉」のためには女性と胎児を殺す、という事は、いつの時代もどの地域でも、しばしば起こることなのです。まして、没落してしまっている「名家」です。「家名」がすべて、と思っている人も、たくさんいる。実家は、二人にとって、とても危険な場所だったのです。



それでも、仕方がありません。二人はナザレを旅立ちました。目指すは、ヨセフの実家がある「ダビデの町・ベツレヘム」でした。実家があり、幼馴染（おさななじみ）がたくさん住んでいる町。そして、住民登録のために、分家筋も含めて、大勢の親戚が集まってきているタイミングです。そして、マリウムは、そろそろ臨月でした。それでも、とにかく、二人分の住民登録は済ませなければならない。間の悪いことは、続くものです。旅の疲れもあったのでしょうか。予想よりも少し早く、マリウムに陣痛が来てしまいました。ちょうど、ベツレヘムに到着したタイミングでした。婚約者のヨセフは、懐かしい故郷で、たいそう慌（あわ）てました。それでも、無事に、マリウムは男の子を生み落としました。すごいことです。人の生き死には、やはり、「家名」尊重のために邪魔だと思われようとも、そして、たとえ皇帝陛下に邪魔されようとも——ご無礼をおゆるしくください！—— 実に、神様の手の中にある事柄なのです。マリウムは産着（うぶぎ）に赤ちゃんを包み、そして寝かせました。寝かせた場所は、「家畜の餌箱」でした。人目をはばかる二人には、泊まる宿がなかったのです。



「家畜の餌箱」は、家畜小屋にあります。家畜は、恐ろしい伝染病のもとです。従いまして、家畜小屋には、最小限の数の家畜だけ、留めておきます。そして、その家畜小屋は、町の外側に建てるものです。その家畜小屋に、臨月のマリウムを連れて、ヨセフは逃げ込んだのでした。町と外の境目に建てられた家畜小屋。そして、その背後には、広大な野原があり、そしてその野原には、羊を預かる羊飼いたちが野宿をしていました。羊を見張る、見張りの仕事をしていたのです。

そこに、聖書の神・主の御使いが現れました。「聖書の神・主」の本名は「ヤハウエ＝あらしむるもの」です。世の中の冷たい風・権力の恐ろしい圧迫。それらをまったく寄せ付けず、いのちを有らしめ、そして、いのちを召し上げる。そんな力が、あるのです。その力そのもののことを「ヤハウエ」といい、その通り名を「アドナイ（主）」と、この地域の人々は言っていました。その「主」の御使いは、茫漠（ぼうばく）と広がる野原に現れました。夜も町に入ることが許されない羊飼いたちに、「主」の御使いは、現れたのです。



そこには羊がいました。たくさんの羊がいました。しかし、その羊は羊飼いたちのものではありません。王宮や町の中心地に住むお金持ちの財産です。この夜、その羊たちの持ち主は、それぞれの町や都市の中の、温かく安全な部屋の中でくつろいでいました。自分たちの財産ですが、自分たちで守る必要もない。お金をかけて、羊飼いたちに管理させておく。羊飼いの人数が足りないと困るので、一度羊飼いとなった人間は、もう、羊飼い以外の仕事はできないようにしておく。動物は、伝染病のもとです。動物に触れた人間は「穢れている」という事です。ですから、しょうがないのです。羊飼いは、一生、羊飼いとなって、町にも入れず、一生、野宿して暮らす。その子どもたちも、そうやって生き、死んでゆく。もっとも、子どもが生まれたら、特別の手続きをして、特別の許可を取って、町の中に入り、神殿に行って、神様におささげものをしなければなりません。そうしないと、神殿も困ります。神殿だって、経営しなければならないのです。その神殿が、とくとくと教えるのです。「この子は、穢れた家の子どもだ。神様の命令だ。これからも、町に入ることなく、穢れた人間として、分をわきまえて生きよ。」――これで、完成です。羊飼いは、ずっと、人間として扱われずに、生きて死んでゆく。そうして、お金持ちたちの財産は安く管理され、そして、そこから出てくる利益のおこぼれを、また、神殿が頂く。神殿だって、経営があるのです。神様の御宮（おみや）です。立派に経営しなければ。

でも、この時、異常なことが起こりました。そうして立派に運営している神殿ではなく、その神殿を中心に設計されている町の中でもなく、その町の外側のはるかかなた、野原の真

「まったく、ぜんぜん、
怖がらないでもよいのです。
その理由を、さあよく聞いてごらんなさい。
私が来たのは ただ一つ
闇に沈む あなたたち
一人ひとりを救いだす
素敵な知らせを伝えるためです。
お伝えするのは 巨大な喜び。
すべての人々が ひとりも残らずあまされず
全員 しっかり 喜ぶお知らせ。
全員しっかり喜ぶためには
まずは誰より あなたたち。
あなたを雇った人々に
使い捨てられている あなたたち。
捨てられたことすら忘れられ
広い野原に生きて死ぬ。
そんなあなたに神様は
この喜びを まず伝えよと
そう私に命じられた。
そうして初めて なるほど確かに
この喜びが 全ての人の喜びであると
はっきりしっかり 示されるわけです。
だから、どうぞ、あなたたち、
恐れることは、ないのです。



This detail from Michelangelo's 'The Fall of Man' depicts Adam reclining on the ground, his body stretched out in a state of exhaustion or contemplation. He is looking up towards the sky where the angel Gabriel is flying towards him, carrying a scroll. The scene is set in a lush, wooded landscape with other figures, including Eve and the serpent, visible in the background. The lighting is dramatic, with a strong light source from the sky illuminating the figures and the ground.

このことこそが、徴（しるし）になります。
全ての人の喜びが 確かにやって 来たことの
はっきりとした徴（しるし）となります。

すると突然、天の大軍勢が現れ、
この聖書の神・主の御使いと共に、
神を賛美して歌いました。

天の頂き 一番高い場所いっばいに
神様の輝きがありますように。
(そうすれば、
どんなに深く暗い谷間にいる人にも、
その光が届きます！)

地べたに平和が行き渡り
すべての人に平安が
確かにしっかり満ちますように。
すべての人の 一人ひとりが 神さまの
喜びそのもの なのだから。



そのうち天の軍勢は、御使いと共に、天に戻って行きました。そうしてやっと、羊飼いは互いにこう言いました。「これは、ベツレヘムまで行かなければ。聖書の神・主が告げられたのだ。どうなっているのか、見に行こう。」とにかく急いでベツレヘムへ。町の中には入れません。でも、とにかく行ってみることにしました。すると、町の中に入る手前、家畜小屋がありまして、そこに赤ちゃんの声が聞こえる。これは、と思って中を覗くと、マリアムとヨセフ、そして赤ちゃんが中にいる。赤ちゃんは、確かに餌箱に寝かされていたのでした。

それを見た羊飼いたちは、自分たちに御使いが語ったこの子どものことを、あちこちへ行って語るようになりました。この話を羊飼いたちから聞いた人々（つまり「穢れた」彼ら・彼女らと日頃から付き合っている貧しい仲間たち）は、たいそう驚いたことでした。ただ、マリアムだけは、ただひとり、こうした出来事を心に留めて、その一つひとつを反芻（はんすう）し、その思い出の中に身を沈めるようにしていました。

ともかくこの時、羊飼いたちは、天の軍勢と主の御使いがそうしたように、今度は自分たちの口で、神様を称える歌を歌いながら、帰りました。すべて、自分たちが見た事柄が、聞いた通りのことだったからでした。